



「若気の至り」

公益社団法人 日本防犯設備協会 理事
防犯設備士委員会 委員長
エフビーオートメ株式会社 代表取締役 **平野 富義**



泳げない身では海に行っても楽しみがない。何か楽しむものはないかと思い考えた結果、ヨットに乗れればと思い、一冊の本を読み、先ずは体験と思い芦屋浜（兵庫県）の貸しヨット屋の親父におそるおそる相談してみた。よしわかったと超ペテランだと紹介されたのが親父の息子（どう見ても中学生）。おいおい大丈夫かと思いながら教えを乞うこととした。教えるというより乗って見せるから見て覚えろという感じ。

ヨットをやっている人はおわかりだろうが、A級ディンギーは砂浜から出て元の砂浜に戻るのは少々テクニックが必要だ。砂浜ではラダー（舵）もセンターボード（横流れ防止板）も外し艇に積んでいる。艇を押しだし1mくらいの水深のところで艇内からラダーをセットし次にセンターボードを差し込むことになる。戻ってくるときもその逆で水深が1mくらいになった時、センターボードとラダーを急いで引き上げ、惰力で砂浜にのり上げることになる。すなわち桟橋から出航するより遙かに厄介だ。またこのA級ディンギーの操縦はセール（帆）を固定している竹の部分をいつもマストの風下側に持って行かなければならないので初心者にとっては結構難しい。1時間くらいの間に、この一連の動作と操縦方法（風の吹いてくる方向とセールの出し方）とバランスの取り方をマスターしなければならない。特に方向転換がこれまた大変である。

心配した貸しヨット屋の息子、私にとって師匠の手ほどきよろしくこれを機に一人で楽しむこととなり今も続いている。（師匠に感謝、感謝）これまでいろんなヨットに乗ってきた。メインセールだけのホッパー、ジブセール付きのスナイプ、シーホース、Y15、双胴船のAQUA-CAT、etc.

ヨットは琵琶湖で乗ることが多かった。琵琶湖は比叡山からの吹き下ろしの裏風を受けてよく沈（ひっくり返る）する。私も一度だけ経験している。ロータリークラブでお世話していたエストニアからの交換留学生（女性）と友人と3人でディンギー（キャビンのないヨット）に乗っていた時、突風にあおられそのまま横倒しになり、3人とも湖に投げ出された。全員ライフジャケットを付けていたので大事にならず、ヨットを起こして3人とも無事乗船し何食わぬ顔でそのままセーリングを楽しんだ。先にも書いたが、私は泳げないので、突風が来たとき沈を避けるためセールの風を逃がすのにセールに繋がっているシート（ロープ）をいつも手で持っていて、突風が来た時反射的にシートを緩め沈を防いでいるが、その時はシートの上に誰かが座っていたためコントロールができずに敢え無く沈となってしまったのである。



20年ほど前、28フィートのヨット（12人乗り、簡易ベッド付き）で海路徳島の阿波踊りを見に行った時期が3年ほど続いた。大阪堺港を出て、関空を左に見て友ヶ島（和歌山と淡路島の間に横たわる島）水道を通り徳島に向かうコース。瀬戸内海は潮の流れが速く川のように流れているところもある。狭い水道ではあるが、本船航路になっているので上海行きフェリーや10万トン級のコンテナ一船も通る。さらに漁船も多く、2隻で網を引き操業しているときもあり、その網の中に入ってしまうと大変なことになる。また、海が荒れると波間に他のヨットのマスト上部しか見えないようなときもある。そんな時はヨット内のトイレで小用を足すにも一苦労する。



6時間ほどの航海で徳島県庁前の川岸に作られた係留場に到着。明朝の出港の準備をしてから着替えて上陸し、阿波踊りの連を見ながら夕食処を探しゆっくり食事を楽しむ。「踊る阿呆を見る阿呆、同じ阿呆なら踊らにゃそんそん」というかけ声があるが、いつの間にかお囃子につられて仲間入りしている。今は亡き瀬戸内寂聴さんや結構有名なスターにも出会った。踊り疲れたあとは汗と潮にまみれた身体を癒やしにサウナに入り、さっぱりした身で夜風に吹かれながらヨットに戻りキャビンの簡易ベッドで睡眠をとる。翌早朝ヨットハーバーをあとにして帰途につく。途中、淡路島近くの沼島という小さな島に停泊し釣りを楽しんだあと新鮮な海の幸を味わい、一気に堺港を目指すことになる。



私の好きなもう一つのマリンスポーツは水上バイクだ。以前グアム島に行った時に初めて挑戦し、それ以来病みつきになり年齢も忘れて今も現役で楽しんでいる。

自動車の運転免許証と小型船舶操縦士免許証は身体が動く限り返納できそうにない。

